

1974. 日本随筆大成. 第2期 14. 175-196. 吉川弘文館, 東京).

小野蘭山. 1803-1806. 本草綱目啓蒙. 卷之二十八 果之四. (復刻版, 1991. 本草綱目啓蒙 2. 東洋文庫 536. 286-295. 平凡社, 東京).

冷月庵谷水. 1773. 料理伊呂波庖丁. (吉井始子, 編. 1980b. 翻刻江戸時代料理本集成. 第7巻. 3-47. 臨川書店, 京都).

山音亭. 1819. 精進献立集. (吉井始子, 編. 1980c. 翻刻江戸時代料理本集成. 第9巻. 3-235. 臨川書店, 京都).

杉野權右衛門. 1802. 名飯部類. (吉井始子, 編. 1980b. 翻刻江戸時代料理本集成. 第7巻. 273-306. 臨川書店, 京都).

多治見貞賢. 1489. 四條流庖丁書. (塙保己一, 編. 1819 (復刻版, 1933). 群書類従. 第19集. 764-779. 続群書類従完成会, 東京).

寺島良安. 1712 自序. 和漢三才図会. 卷八十九 味果類. (遠藤鎮雄, 編. 1980. 日本庶民生活史料集成第29巻. 和漢三才図会 (2). 725-731. 三一書房, 東京).

東洋経済新報社. 1935 (復刻版, 1975). 日本貿易精覧. 東洋経済新報社, 東京. 708 pp.

渡邊 武. 1955. 胡椒. 「正倉院薬物」. 133-136. 植物文獻刊行會, 大阪.

著者不明. 刊年不明. 古今料理集. (吉井始子, 編. 1978. 翻刻江戸時代料理本集成. 第2巻. 3-223. 臨川書店, 京都).

著者不明. 1751-1764 頃. 当流料理献立抄. (吉井始子, 編. 1980a. 翻刻江戸時代料理本集成. 第6巻. 3-40. 臨川書店, 京都).

(2005年7月27日受理)

書評: 松井 章. 2005. 環境考古学への招待—発掘からわかる食・トイレ・戦争—. 岩波新書 新赤版 930. ISBN4-00-430930-1. 岩波書店, 東京. 価格 777 円.

この記事を読者が目にするのはこの本の出版からもうすでに一年を過ぎてからであり, 新刊と言うには賞味期限を過ぎそうなところだが, 是非とも紹介したい本である。

環境考古学という言葉が私たちに馴染みになったのは安田喜憲氏の『環境考古学事始』(NHK ブックス, 1980年刊)ではなかっただろうか。安田氏はその後も「環境考古学」の名を冠した著作を引き続き出されており, 文明論まで行き着いている観がある。環境考古学という言葉が意味するのは「遺跡の環境=遺跡の周囲の環境=植生」ということで, 主に花粉分析から遺跡の堆積物の花粉組成を知り, それを基に古環境としての植生を復元する, という流れで研究が進められてきたように思う。これは我が植生史学会の成り立ちそのものでもあるが, 植生史学会の目指したところは, 遺跡の植生環境をより実体的に, 言ってみれば三次元的に復元するには, 花粉分析だけでなく, 種実等のいわゆる大型植物遺体や, 木材遺体, 植物珪酸体, 珪藻など, 各種の分析可能な手段を複合的に講じて, 総合的な解析を行うことを推進してきたことであろう。いきおい, これらの調査分析というのは植物学や, 地質学, 地理学の研究者がおもに手がけることになってきたのは事実である。その目指すところが, 植生の復元と変遷に中心があるのが植生史学であるし, 植物そのものに中心があるのが考古植物学 (archaeological botany, わたしは植物考古学とは言わない) である。

一方, 考古学を探究しようとする学生が縄文時代をテーマに取り上げれば, 貝塚というのは避けては通れない道だろうと私のような考古学の外にいる人間からは見える。貝塚に取り組みば土器や石器ばかりでなく, 貝そのものにも目が行き, また貝塚だからこそ良好に保存される動物や魚の骨などの動物遺存体の研究が大きなテーマとなり, 実際多くの考古学徒がこの研究を専門とし, 本書の著者もその

一人である。だからこの本は動物考古学を専門とする著者が視点と対象を拡大した結果としての「環境考古学」であるとはいえ, 私たち, 「環境=植生」ばかりに目が行ってしまっている者にとっては目からウロコの話が盛り込まれている。

本書は限られたスペースの中に「食卓の考古学」, 「土と水から見える古代」, 「人, 豚と犬に出会う」, 「牛馬の考古学」, 「人間の骨から何が分かるか」, 「遺跡保存と環境」の6章を収め, 中身が濃い。「食卓の考古学」はまさに貝塚から話が始まるが, 貝塚貝層を洗い上げた中から, あの小さな小さなイワシの骨など, 実に様々なものを見つけ出し, 同定してゆくのはまた, 植物遺体の同定とは違った中々奥の深い世界である。「土と水から見える古代」がいわゆるトイレ考古学で, 筆者が奈良という, この分野の研究には絶好の地にいたことがこれだけの広がりをもたらしたと言うことが, 匂ってくるがごとくよく分かる。3章と4章が動物考古学者たるゆえんの話で, イノシシと豚の問題は我々にとっても非常に興味をそそるものである。特にミトコンドリア DNA の解析結果とこれまで蓄積されてきた動物考古学的知見との齟齬をどう解決しようとしたかについては植物の DNA を扱っているものにも示唆に富む。動物考古学をやれば当然人骨は大きな研究テーマとなる。「人間の骨から何が分かるか」の章はそういった経験を書いたもので, 実に犯罪を暴く科学捜査官そのものの姿である。本の副題に「戦争」の文字があり, この章を指してるわけだが, 縄文戦争論とのからみで話題を展開している。

このような本を書いてくると最後にはやはり, 落ちをつけないと寝覚めが悪いもので, 「遺跡保存と環境」の章がある。著者が世界中の遺跡を足で歩いてきた豊富な経験と知識に裏打ちされ, 遺跡と文化財, そしてそれを取り巻く環境の保全に直言している。なんと言ってもこの本に満ちているのは著者のバイタリティであろう。2003年には彼が

編者となって『環境考古学マニュアル』（同成社）が出版されているが、それは多くのその道の専門家が分担してそれぞれの手法を解説したマニュアル本であり、そこでは彼

自身の考えというものをそのまま表明するのは憚られたのであろう。本書の方は著者の環境考古学に対する意気込みを大きな声で、広く呼びかけたものといえる。（鈴木三男）

書 評：吉田外司夫（写真・解説）. 2005. ヒマラヤ植物大図鑑. B5版 800頁, 4色カラー 784頁. ISBN4-635-58031-8. 山と溪谷社, 東京. 価格 13,650円.

ものすごい本が出た。ヒマラヤの植物を、それこそすべて網羅したカラー図鑑である。1771種類の植物が2739点の写真で余すことなく示されている。何れの写真も極めて品質の高いすばらしいもので実にカラフルなのだが、この本は通常の植物写真集とは大きく異なる点がいくつかある。まず、目に付くのは、大きな写真と2, 3枚の小さな写真で各頁が構成され、前者は多くの場合、周囲や背景も写っていて、どのような場所にその植物が生えているのかが良くわかることである。そして頁の右側には1種類ずつ植物の解説が簡潔に書かれている。面白いのは各写真のキャプションで、植物名のあとに撮影日があるのは当然として、その次にJやY3とかの記号、そして地名と標高が記されている。JとかY3というのは、その写真を撮った場所の地図番号で、巻の始めの方に載っている。そこを見ると記号のあとの地名が必ず地図内に出てきて、撮影場所がピンポイントで特定出来るのだ。書いてある日付と標高のデータを加味すれば、その植物を見なければいつ、どこに行けばよいのかたちどころにわかる、と言うものである。もっとも吉田さんの撮影地は私たちがそう簡単には行けないところばかりであるのだが。

著者の吉田外司夫さんに始めて会ったのはネパールはカトマンズで、1985年のことである。確か私はチタワンの植物調査からカトマンズに戻り、次の調査の準備をしているときで、吉田さんもゴサインクンド方面の取材から帰り、次のアンナプルナ方面への準備中だったと聞いている。それは、まあ、運命の導きとでも言えるようなもので、もしこの時の出会いがなければ、とつい考えてしまう。実際、吉田さんがヒマラヤの植物写真撮影を目指してこの地に来始めたのが1984年で、まだ「植物写真家」というより「植物の写真も撮る写真家」だったのではないだろうか。吉田さんが金沢大学の出身で、当時の私は金沢大学に勤めていたのですっかり意気投合し、われわれの植物調査隊のボスの大場秀章先生（東京大学）を始め、メンバーに紹介した。これこそまさに、「植物学のできる」植物写真家吉田外司夫の誕生の瞬間だったと思う。

吉田さんの植物写真のスタイルにはいくつかの特徴がある。彼の言うには先ずは巨理俊次、富成忠夫両氏のスタイルをまねることから始まったという。わたし自身、学生時代には還暦を過ぎた巨理先生のギャジツを担いで山に同

行し、先生と同じ植物を同じスタイルでとることで撮影法を学んだのだが、巨理俊次先生の植物写真は徹底した「植物学のための植物写真」であったと言えると思う。ヒマラヤで植物写真を取り始めた吉田さんはだんだん自分流を作り上げてゆく。その最たるものが「訪花昆虫の目線」ともいえる徹底したローアングルと、植物の背後に広がる景観を画面に取り組んだ画面構成だろう。人の目線から虫の目線への変化は花の見え方を一変させた。花の色やかたちなど、すべてが単なる観賞物から、意味のある命の現れとなった。背景の中に植物をおくことによりその植物の生き様や生態が見えるようになった。あたかもヒマラヤの山に立ってその花を自分が見つめているような世界の広がりを感じられる。

本書の特徴は、ヒマラヤの高山植物を1冊の本に載せ尽くした、と言うばかりではない。巻頭に大場氏の「ヒマラヤの植物研究史」があるほかは、各頁の植物の解説はもとより、「ヒマラヤの植物地理」、「ヒマラヤ山脈の地域区分」、「ヒマラヤの植物の水平分布と垂直分布」、「ヒマラヤ高山植物の適応戦略」の各解説、それに参考文献リストがあり、これらすべてが吉田氏のオリジナルな著作であり、何れも植物学の学術論文として通用する内容を備えていて、まさに「植物学のできる」植物写真家であることを遺憾なく示している。特に圧巻は東西に弧状に伸びるヒマラヤの植物分布を大きく区切る「チャムラン障壁」の発見で、ヒマラヤ中の植物を見て歩いたからこそ説得力を持って示すことが出来たと言える。

ヒマラヤの高山帯ではかがみ込むだけでも容易なことではないのに、地面に這いつくばってひたすら息を凝らしてシャッターチャンスを待つのは実に苦しいものだ。勿論、機材を抱えての山登り、何十日にも渡るトレッキング、風雨や土砂崩れ、また道を失って高山帯を彷徨することもたびたびで、常に命の危険と隣合わせの取材が20数年にも渡って続けられてきたという。この本はそのすべてが昇華して開いた大きな花と言える。この本を開くことにより、だれもがヒマラヤの花々と親しくなることができることに、ヒマラヤの植物を研究しようと言う植物研究者にとっては最高の文献でもある。

（本文は「アサヒカメラ」（朝日新聞社）2005年8月号掲載の文章に加筆したものである）（鈴木三男）